



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	市川治著, 『交換耕作形成の研究』, 農林統計協会, 1997年, 209頁
Author(s)	谷本, 一志
Citation	北海道農業経済研究, 10(1), 53-56
Issue Date	2001-11-30
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/63461
Type	journal article
File Information	KJ00006912146.pdf



[書 評]

市川 治著

『交換耕作形成の研究』

農林統計協会 1997年 209頁

北海道東海大学 谷本 一志

本書は、畑作経営のつねに直面している連作障害・地方維持問題とそれを回避する一つの土地利用方法としての交換耕作を取り上げ、それを形成させ存立させる条件を正面から分析した労作である。これは、水田転作の集团的土地利用とは大きく異なる、畑作・酪農にみるこの交換耕作という土地利用形態の本質を解明し、集团的・計画的な交換耕作へ向けた地域の推進システムの必要性和その存立条件とを綿密な事例を通じて分析・検討している。

本書の構成としては、序章に続いて、第1章の「畑作農業の課題と交換耕作の出現」では、畑作における連作障害と地力問題を誘発する要因が考察されている。必然的に直面する畑作の連作障害を回避する、さまざまな耕作者の知恵ともいうべき経営的対応が描き出されている。第2章の「集团的交換耕作の過渡型の形成と展開」では、新たな畑地の土地利用方式の模索と、その下での交換耕作という利用を方法の展開する意義が、第3章の「集团的交換耕作の存立形態と条件」では、交換耕作が個別相対で展開し、きわめて永続性の乏しい展開が現実であり、それをどのように集团的・計画的な交換耕作に向けて条件整備をしていくかが検討されている。第4章の「集团的交換耕作の発展段階」、第5章の「交換耕作の展開・拡大条

件」では、ともに北海道鹿追町において展開してきている農協主導型の交換耕作の一つの典型事例として取り上げられ、その分析をも踏まえて、交換耕作形成の本質についての議論が展開されている。同時に、個別相対に展開しがちな交換耕作を、集团的・計画的交換耕作へ向けて、どのようにすれば十分に展開しうるかが検討されている。そして、これら分析から総合的に検討され、終章が導かれている。

そうした内容のなかで、著者が本書で強調していることとして私は3つの点から考えてみたい。まず1つには、畑地で展開する交換耕作の形成は水田転作という集団転作・団地化などの、「上から」の政策的助成のもとで展開している集团的土地利用とは明確に峻別しているということである。むしろ、畑地経営において展開している交換耕作こそ、「下から」の自主的な発意によって登場した集团的土地利用の典型的形態ではないか、と指摘していることである。ここでの交換耕作は、お互いの土地を相互に交換することであり、交換することでお互いの連作障害・地力維持に要する経営的負担を相殺しようとする土地利用関係ということがいえよう。

そして、畑作・酪農にみるその交換耕作形成は決して「上から」ではなく、むしろ畑作特有の連作障害をいかに安上がりに回避し地力維持を仕組んでいくかを考えた結果として登場するということなのである。しかもそれは、生産力維持・回復を志向し経営的採算性を追求した「下から」の行動であり、交換耕作があくまでも自発性のなかか

ら形成されたものであることが大きく強調されている。畑作経営にとって、作物の連作は必ず障害を引き起こし、それを回避しなければ収量は漸次低減するし農作物の品質も劣化させることになる。結果として、経営悪化に陥ってしまうことにもなりかねない。輪作体系の一環を別の形で、この交換耕作は双方の個別経営が自然発生的に互いの知恵として生み出されてきたものなのであろう。連作障害・地力問題の顕在化のもとで、条件さえ揃えば交換耕作は十分に展開しうるし、集団的推進システムという仕組みも成立しうると指摘されている。

2つ目として、組織的対応の観点からは個別相対として中間生産物の交換利用とそれに派生した個と個の交換耕作の段階、グループ機能集団としての交換耕作の段階、集落機能も取り入れた集落ぐるみの集団的・計画的交換耕作の段階を指定し、どのような条件下において集団的・計画的な状況に到りうるか、を北海道鹿追町での交換耕作を事例に分析している。それがないところでは、畑作特化のところでは土づくり問題、酪農特化のところでは糞尿処理・環境保全問題に遭遇せざるを得ない。また、地域的に経営形態の特化しすぎた地域では交換耕作自体が成立しにくい。つまり、相手がないなかでは交換耕作は成立しないことになる。

著者は、交換耕作の昭和50年代の急激な展開を挙げ、その拡大には土地・土壤条件の急速な均質化が不可欠であり、等価面積の交換耕作を容易にした大きな要因として、この土地改良・圃場整備事業があったとしている。また、この交換耕作は個別複合として経営部門に酪農経営部門を抱えた混同経営であるか、畑地としてみれば「畑作穀実作物の生育が最低限成立する限界地的なところで成立・展開が進む」(183ページ)としている。両者が折り合うだけの最低限の水準というものはあろうとはおもわれるものの、土地生産力的に草地にかなり近似した畑地と酪農との間で等価交換

的な交換耕作が成立する関係と位置づけている。規模拡大志向が強いにもかかわらず、それに見合う土地がなく外延的拡大が実現できないケースほど、交換耕作は成立しやすいとし、本書184ページに掲げられている交換耕作の具体的事例によれば、一方の畑地を利用する酪農経営はデントコーンを作付けており、デントコーンの作付け可能な畑地というのが交換耕作の対象地選択の前提条件となっている。交換耕作として牧草もありうるが、事例として畑作農家から酪農家への注文として「牧草の作付けは困る」との発言も示されている(166ページの注)。畑作経営の側は、それまでの作付けされてきた草地に当然ながら「非」牧草を作付けするはずである。甜菜や馬鈴薯などを作付けており、そうした作付けに耐えうるだけの地力をもった草地との交換耕作ということになり、通作距離も含めてかなり展開自体が限定的となりうることを示している。

畑作経営としてみれば、満度に収益性の高い畑作作目を作付けして収益を上げようとするか、機械稼働力の高い作目に特化しようとするであろうから、特定作物への過作・偏作に陥りやすい。そこに連作障害・地力問題を顕在化させる要因が潜んでいる。連作を解消し、収益性の高い過作・偏作から崩れた作付体系を取り戻すため、作付面積を減らすという行動ではなく、経営規模を拡大するなかでアンバランスを解消しようとするから、適正な輪作体系を取り戻すには土地面積が不足する事態に直面するし、土地購入や貸借とは別に交換耕作への要求もそこに発生する、としている。

酪農経営としてみれば、酪農家の利用する交換飼料畑での高栄養価のデントコーン確保とそれによる乳質量向上と同時に、交換耕作は一時的に草地を畑作化してもらうことで草地更新を実現するという側面もあろう。事業絡みで草地を更新するには、事業に乗るとすれば即座にはできないし単独で実施するには費用もかさむ。それを、交換耕

作という方法を用いることで、畑作経営側に甜菜や馬鈴薯など畑作物を草地に作付けてもらう。草地として飼料作である牧草を連作してきたことから、雑草も生え栄養価も落ちてきた土地に対する草地更新を、自らおこなわずして交換耕作の相手農家の利用によってそれを達成することができるからである。

酪農経営にしても畑作経営にしても、地域において中核的農家が継続的に将来にも賃貸なり売買で規模拡大をすすめ、その一時的・過渡的段階として交換耕作が取り組まれている。双方が家族労働力・作付作物の組み合わせ、さらには耕作規模と保有機械力などの条件自体が過渡的・暫定的であるがゆえに、交換耕作形成の関係も変動的なものにならざるをえない。こうした双方の経営事情のなかで、輪作体系・地方維持を図る最も有効かつ合理的な仕組みとして交換耕作が志向されている、とみることもできるのではないか。

そこで交換耕作を展開させようとする農家の特徴としては、双方のともに連作障害・地力問題を正面から対峙し克服しようとする経営意欲の高い専業農家の可能性が高いのではあるまいか。そうだとすれば、規模拡大志向農家と後継者不在の高齢農家との間に展開するような賃貸借があるとすれば、そこにおける双方の間の関係とはおのずと大きく異なるはずである。たとえば、賃貸借に発展する過渡段階として交換耕作が位置づけられると仮定しても、その関係自体はたとえば高齢農家との賃貸借としての双方の関係としてではなく、まったく組み替えられ入れ替えられたなかで交換耕作は展開する可能性が大きいのではないか。

3つ目として、そもそも安定的・長期的に交換耕作が定着するには、やはり著者の指摘のごとく、個別相対型交換耕作の段階を脱し、地力維持システムとしての関係を集団的・計画的な交換耕作として組み立てなおす必要があるということになる。その論旨は明快であり説得的である。ただ、

本来的に交換耕作は規模拡大を志向する、そしてしてきた畑作地帯の個別経営にとって暫定的・相対的であったのではあるまいか。規模にしても保有労働力・保有機械装備にしても、双方の経営規模が過渡的であり変動的なものであるとするならば、もっとも双方の経営にとって一時的・相対的な交換耕作の関係がもっとも無理のない形であり、リーズナブルなのかもしれない。それをあえて固定的にシステム化すること自体、そこに無理が生じ双方に齟齬が生まれるという可能性もありはしないだろうか。

ともあれ、土地利用の面から、あるいは地域農業の側面からいえば、著者の論旨通りであることは疑いない。そして、交換耕作の形成は畑作と畜産との結合が強い地域複合という観点から位置づけることができ、その推進主体・支援組織が重要なファクターとなる。連作障害を問題化することは個別経営の存立にかかわるのみならず、産地脆弱化・崩壊に関わることから、地域全体で考えていかねばなるまい。交換耕作も当然のことながら、著者の力説するように集団化・計画化していく必要性がそこにあるはずである。そこには、地域複合化に向けた努力が求められるであろうし、地力維持再生産構造としての輪作体系確立のためには、この交換耕作のもつ経営的意味はきわめて大きいはずである。とくに、農地価格が低落し、農産物価格自体も不安定ななかにあつては経営基盤の強化としてこれは有効な手法であり、地域的にも集団的・計画的に交換耕作を展開させ、さらなる存立条件を模索する意義はきわめて高いとおもわれる。

今日の意味として、いくつか交換耕作に関係していくつか課題が生じてきているようにおもわれる。それは、交換耕作が別のシステムに包摂される、あるいは変質するということである。たとえば、その1つには、農地過剰時代となり土地購入・貸借が以前より担い手にとって、遥かに入手

しやすくなり売り手過多・貸し手過多のもとで交換耕作自体が変質することはありうるのか、2つには、著者も指摘しているがコントラクタなど農作業受委託事業の展開により、交換耕作をどのように組み込みつつ、一括利用という仕組みのなかに包摂され、土作りが図られていくのかどうかである。たとえば、鹿追農協による作業受託組織のように牧草収穫作業を中心とした酪農部門のコントラクタ展開であっても、交換耕作がそのもとでどのように組み込まれるかである。3つには、緑肥鋤き込み・休閑など地力増進に対する支援措置や自主的選択が従来の交換耕作形成にどのように影響していくのか。とくに、こうした助成策により、必ずしも交換耕作という相互調整の途を選択しなくとも、連作障害を回避し土作りが自己完結型経営のなかにビルトインできる可能性もある。また、今日では周辺に滞留しはじめた農地を、安く一時的に賃貸するなり作業受委託するなりして交換耕作に代替し、それを利用しつつ計画的に過作・偏作を修正する、あるいは輪作体系の修正を図る途もありうる。

北海道においては、規模拡大においても同様であるが、農家も行政とともに所有権中心主義に傾きすぎているきらいがある。それと平行して、土地利用中心の農家相互調整装置を走らせることがきわめて肝要であり、連作障害回避としての交換耕作も、賃貸借や作業受委託の展開など同様に、土地利用をいっそう充実させる内部装置なのである。

この交換耕作は、交換分合など所有権に立脚した集団化という財産権に抵触する、きわめて作動の困難な途を取って模索しなくとも、交換耕作による「土地利用の相互調整」・「土地の集团的・計画的利用」という方式によって目的を達成することも可能なものであり、大いに評価できるのではあるまいか。その意味でも、本書は時宜を得たものであり、多くの方々による利活用を大いに期待するものである。

三友盛行著

『マイペース酪農－風土に生かされた適正規模の実現－』

農文協 2000 年226 頁
酪農学園大学 吉野 宣彦

I. 新しい時代の批判的酪農論

一農業者の手による本書が学会誌で評されるには理由がある。まず目次が「経営編」「技術編」「暮らし編」で構成されているように、久しく世に示されなかったトータルな経営論を展開していること。また「21 世紀は『農業の時代』」で書き始められているように、環境問題に対応した新しい経営像を提示していること。さらに三友農場の経営的成果をもたらした技術、行動、思考を実践に基づいて示しているだけではなく、「マイペース酪農をめざす農民」たちとの、過去 10 年にわたる学習活動の経験を糧に書かれていることである。新しい時代に即応した酪農をトータルな視点で、「上からの指導」や「農政側の思考法に支配」されない「農民自身の言葉で語」という、意欲に満ちあふれたこの作品は、農業者への啓蒙書に止まることなく、多部面の研究者への問題提起を意図した挑発の書となっている。まず著者独特の思考や選び抜かれた言葉に理解を深めたい。

II. 量より質重視の経営管理論

第 1 部「経営編」では、まず三友農場は、1 頭当たり乳量は少なく生産規模は小さいが、購入飼料の給与量が少なく、低コストなため所得が高いことをもとに、多くの酪農家は「頭数も乳量も多すぎ」、「『拡大』よりも『習熟』」を重視すべきと主張している。その後紹介される経営管理の手法は、コストをどう低減するかというテーマに貫かれている。

第 1 に、経営分析に関して、多くの酪農家が「負債が多いから経営が悪く赤字になる」と考え、